

第15回 土佐の皿鉢ゼミ開催

教職実践高度化専攻（教職大学院）の院生による実践研究発表「第15回土佐の皿鉢ゼミ」が、2025年8月19日（火）に開催されました。今回も対面およびWeb会議システムZoomによる同期型オンラインのハイブリッド方式で行われ、170名の方が参加してくださいました。

当日は、中野俊幸専攻長の挨拶の後、高知県教育委員会の濱川智明次長による基調講演があり、高知県の人口状況や高知県教育振興基本計画における本年度の変更点、県立高等学校振興再編計画の概要等についてご講話いただきました。



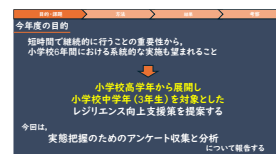
講演ではWell-beingをはじめとする最近の教育関連の言葉が紹介され、データを用いた人口減少の現状と県立高等学校の生徒数等の推移が示されました。そして、この状況がこのまま進むと地域社会が消滅する可能性があることから、県の施策の「4S」重点プロジェクトに県立高等学校の振興と再編を位置付け、振興再編に向けて取り組んでいることが紹介されました。中山間の小規模高校が地元自治体との連携のもと、KPIの設定と結果に基づく入学者確保目標の達成の有無による統合他の対応を行うことや、学校の魅力化に向けたデジタルを活用した「ネットワークづくり」に力を入れていくことなどが強調されました。併せて、多様な生徒の学びの場の確保という観点から、定時制と通信制のあり方を見直しなど高知県の県立高等学校が大きく変わっていくことが説明されました。そして本専攻に対しては、3つのコースにおける学びを生かして各院生が自問自答をしつつ、地域のリソースも生かした学校の魅力化・特色化につなげる研究を進めてもらいたいという期待が寄せられました。

本紙では、基調講演後、各会場で発表した院生のそれぞれの研究における成果や課題と、各コースのテーマ別協議での活発な議論についてご紹介いたします。

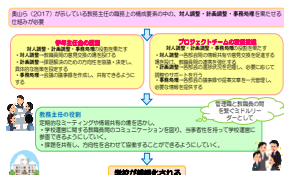
【学校マネジメントコース】

M2 秋澤和希さん 学校教育における生徒指導上の諸課題への教師の手立て-レジリエンス向上に焦点を当て-

生徒指導上の諸課題の多くに共通すると想定されるレジリエンスに焦点を当て、レジリエンス向上支援策を検討し、生徒指導に役立たせることを目的として研究しています。今回は小学3年生を対象とした実態把握のための調査結果について報告しており、今後はレジリエンス向上支援策の効果検証を行います。



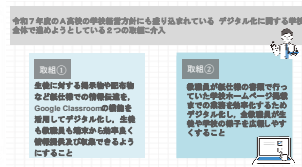
M2 上田稚子さん 教務主任の学校組織への効果的な関わり方について



学校の組織化を目的に、教務主任が対人調整・計画調整・事務処理の役割を果たす仕組みとして、学年主任会の運営とプロジェクトチームの取組の推進を構想し、試行しています。今後は教務主任のリーダーシップにより学校の組織化がどのように促進されたのか実践的な視点から効果を検証していく予定です。

M2 氏原千恵さん 業務の効率化・削減により教育の質を高める学校経営-実習校の実情に即した業務の効率化・削減の手法を探る-

本年度、実習校の学校経営方針に盛り込まれている教育活動のデジタル化に関する2つの取組に介入し、学校全体として業務の効率化・削減をするための校内環境や組織の在り方を検討します。その手立てとして業務DX化の方策を試行することで、学校の組織化のための業務改善の進め方について解明します。



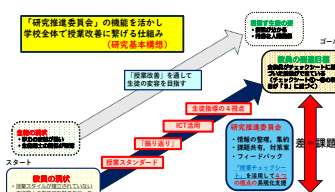
M2 岡野秀哉さん 不登校未然防止のための‘魅力ある学校’について-児童の主観的健康感における意識調査より-



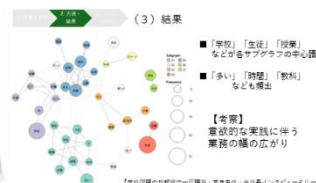
文部科学省調査による不登校経験児童を対象とした調査において、「先生」「友達」が要因と回答した割合は高く、不登校未然防止のためのより良い人間関係の構築が重要です。本研究では、児童の「先生」及び「友達」との関わりについて調査し、発達段階の特徴及び望ましい関わり方が示唆されました。

M2 田村佐緒里さん 中山間地域における小規模校の学力定着に向かう組織の在り方-研究推進委員会の役割を中心に-

学校教育目標を組織的に実現する視点として「授業改善」に焦点を絞って本研究を進めました。具体的に4つの授業改善の視点を「授業チェックシート」という手立てを用いて進め、研究推進委員会が全教員の授業実践のPDCAサイクルを組織的に機能させ、学校の現状と目標のギャップを埋める検証をしました。



Dr. Yoko Kato is a Japanese researcher in the field of human-machine interaction. She is currently an Associate Professor at the University of Tsukuba, Japan. Her research interests include the design of human-machine interfaces, the development of intelligent systems, and the study of human-machine interaction. She has published numerous papers in the field and is a member of several professional organizations.



チームFiatで協賛早期見込店を整理・強化していくために

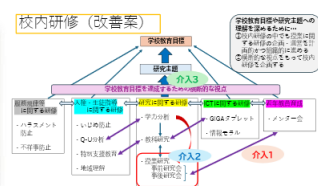
- 担当と連絡
- 可能性を育む土壌
- 協賛関係の情報共有
- 校内支店会の強化

↓

- ◎ 支店方針を合わせることや情報共有の仕組みの明確化
- ◎ 具体的な連携の仕組みの構築



不登校予防に向けた教職員の連携強化に向けた方策を探るため、意識調査を行い、同僚性を育む土台の存在、支援方針の不一致等の課題、情報共有不足といった課題が確認できました。今後は結果を踏まえ、校内支援会に基づくチームで支援を展開する仕組みづくりについて、検討していきます。



よりよい学校組織形成のための学年運営

① 基本事項の整理 ② 教育活動の展開 ③ 学級の運営 ④ 学年の運営 ⑤ 学校全体の運営

学年会

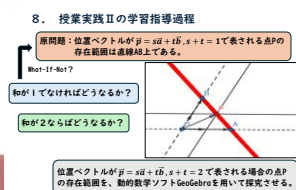
○学年会としての学年・学級経営＝学年会の創設
学級経営を学年単位として組織的に進めさせること **重要**

○学年会としての生徒指導＝共通の生徒理解
一人一人の生徒を理解するとともに、どのように実践していくべきに ついて **重要**

学年組織の形成



本研究では、学校組織の最小組織である「学年会」の役割の明確化と、そうした役割を発揮するための校内環境や組織の在り方を検討します。その手立てとして、「学年会」の運営への具体的な方策を試行することで、学校の組織化のための「学年会」の役割について解明します。



②活動の実施（課程改善のために）

生徒の関心度合いを考慮し、自分の学び方と関連づけて考えられる単元の設定

道徳性
 考えを共有し、聖賢の言葉に学び、道徳性について学びを深める
 具体的なことで学習態度や道徳性向上につながる

知識
 道徳的サポート及び道徳性に関わる学びを「正義」と「フェア」の両方から理解して実践する

道徳的理境の構築

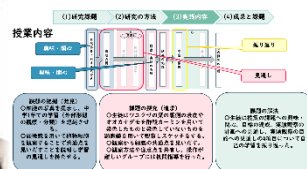
特別活動
 単元学習のなかで生徒の成長を促すことと有
 り。特別活動を通して学びの意欲を高める

総合的な学習の時間
 道徳性について生徒の関心や疑問をテーマとし、
 道徳性について学びを深め、道徳性に関
 する学びを深める

➡



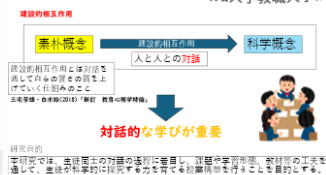
道徳的行動につながる道徳性の高まりの効果を検証するために、コールバーグ理論のもと道徳的判断力を育むことと集団の道徳的環境を構築することの関連を図った授業実践を行いました。今後に向けて、道徳科の工夫や単元の設定により、生徒の問題意識や自己の生き方へのアプローチを行ってまいります。

[illegible]

ICT を数学的教具として用い、生徒が主体的に操作して課題解決をするための教材開発と授業デザインの研究をしています。2 年目は学修した論考と開発した教材を改めて捉え直して分析し、幾何の探究学習の学習段階におけるドラッグの動かし方と役割を新たにまとめました。

M2 松本恭也さん 科学的に探究する力を育てる高等学校理科の授業構想

高校理科の授業で生徒同士の対話を重視した実践を行い、モデルの活用や課題設定、グループ学習での工夫が対話を活性化し手立てとして有効だと分かりました。今後は、単なる対話でなく、自分の考えを伝え合う建設的な対話を促す支援を工夫し、探究的な単元の開発を目指します。



M1 笹本 涼介さん 国語科におけるマルチモーダルテキストを利用した対話力の育成

① 研究の目的

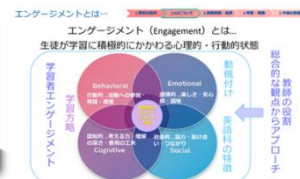
- マルチモーダルテキストの読み方を考える授業
多様な手立てがあることに気づかせ、文章との違いを意識させる。
- マルチモーダルテキストを利用した対話的な授業
多様な意見が生まれ、学びが深まり対話ができる授業を開発する。
【対話的で深い学び】
- 対話力を育成する授業での留意点について行う
【対話力の育成】



中学校国語科におけるマルチモーダルテキストを利用した対話力の育成を目的としています。複数のモードで構築されたテキストによって生徒の意見の多様化を促し、国語教材の文章との比較を通じて、言葉のもつ性質について深く学ぶことができるような授業を行ってまいります。

M1 時久祥香さん 中学校英語科における生徒のエンゲージメントを高める指導法の研究

中学校英語科において生徒の主体性を高め、学習内容の定着を促すエンゲージメント（EG）を取り入れた指導法を本研究の目的としました。授業後、質問紙調査を実施した結果、英語学習における高い社会的EGが確認されました。今後は、認知的EGに結び付ける活動構成や方法の検討を行っていく予定です。



M1 和田萌花さん 「個別最適な学び」を活かした道徳科の授業づくり 一子供が問いを持ち、自己決定する学習を通して



子供が問いを持ち、自己決定・自己評価を通して自己の生き方を考える道徳科授業を構築するため、OPPA理論を活用し、学習過程と思考の変容を可視化する単元を実践・検証しました。「個別最適な学び」を活かした授業の在り方を探っていきます。

【特別支援教育コース】

M2 一谷七菜さん 高等学校における認知特性に応じた学習方略の研究

生徒の学びを保障し、生徒全員が自ら学習方法を選択して学ぶことのできる自律した学習者となるよう、学び方を学ぶ授業を目指して授業実践を行いました。学び方の提案としてのオプションを提示し、自己調整学習を行うことで生徒がどう変容していくかを分析・検討していきます。



学習方略の提案としての「オプション」

- ① 音声ヘルプ（リスニングや動画）
- ② ヒントカード（デジタル/アナログ）
- ③ 学習アプリ
- ④ 集中スペース
- ⑤ ペア・グループ
- ⑥ 個人・先生と学習

形lessな学習環境
各個人学習、各個人との学習に特化



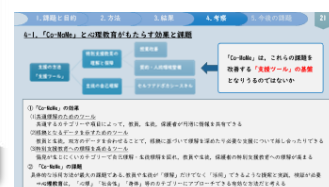
M2 濱田久司さん 特別支援教育の視点に立った全員参加の学級経営



授業の様子や授業参加率、授業アンケート結果からUDの工夫を取り入れた授業は、授業参加率を高めたり、対話的で協働的な学びを促進したりする効果があったと考えられます。子どもたちは、友達と関わり合い、自分の考えを深めていくという、学校でしかできない学びを好んでいることもわかりました。

M2 濱田宏美さん 高等学校における特別支援教育のための支援ツール作成

教員が生徒の困難感や支援ニーズを適切に把握し、共有・支援するための新たな仕組みづくりと、生徒自身の自己理解力及び学び方の主体的調整力の向上を図ることを目的として、国立特別支援教育総合研究所（2024）が開発した「連続性のある多相的多階層支援 Co-MaMe」の活用と検証を行いました。



M2 溝渕優希さん 生徒の特性に応じた授業改善を目指して 一教科会による見立てと手立ての共有

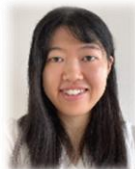
目的・課題	内容・方法	結果	今後の課題
3.2 シートA(新) 高次脳機能障害（一部抜粋）	授業の様子や授業参加率、授業アンケート結果からUDの工夫を取り入れた授業は、授業参加率を高めたり、対話的で協働的な学びを促進したりする効果があったと考えられます。子どもたちは、友達と関わり合い、自分の考えを深めていくという、学校でしかできない学びを好んでいることもわかりました。	授業の様子や授業参加率、授業アンケート結果からUDの工夫を取り入れた授業は、授業参加率を高めたり、対話的で協働的な学びを促進したりする効果があったと考えられます。子どもたちは、友達と関わり合い、自分の考えを深めていくという、学校でしかできない学びを好んでいることもわかりました。	授業の様子や授業参加率、授業アンケート結果からUDの工夫を取り入れた授業は、授業参加率を高めたり、対話的で協働的な学びを促進したりする効果があったと考えられます。子どもたちは、友達と関わり合い、自分の考えを深めていくという、学校でしかできない学びを好んでいることもわかりました。



生徒の実態に即した授業づくりを目指して、生徒の実態や手立てを可視化するツールを活用した教科会のシステムを研究しています。前期は昨年度のツールを改良し、より客観性を高め、どの生徒へも般化できるシートを開発しました。後期は教科会でツールを活用した効果検証を行います。

M1 青山維さん 定時制に在籍する特別な支援を要する生徒に適した数学の教材開発

数学の教材を作成するに当たって、生徒がどこにつまずいているかを明らかにするためアセスメントを行いました。その結果、言語と視空間のワーキングメモリが低いことが明らかになりました。今後は、短所保障の観点から教材開発を行い、その教材の効果を計算問題の正答数の推移で見取っていく予定です。



連立方程式の授業案：数あてゲームで学ぶ①

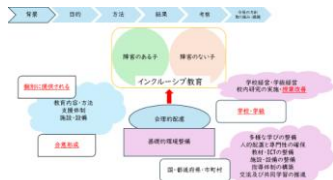
数学教育実践論・数検Ⅱ(1994)
箱の中には、数字の書かれたカードが1枚入っている。
同じ色の箱には、同じ数が入っている。
カードに書いてある数を当てよう！

【情報1】

3つの箱の数の合計は20である。



M1 川田彩加さん 県立中学校における合理的配慮の検討



特別支援学級が設置されていない県立中学校で、支援が必要な生徒への合理的配慮を具体化する方法の確立をテーマとします。これまでアンケート等による実態調査、ロッカーの環境整備、個別学習の実施などを行いました。今後は、さらに具体的な支援策を検討・実施し、その効果を検証していきたいです。

M1 高橋美里さん 特別支援学校における特別活動を軸としたキャリア教育

特別支援学校におけるキャリア教育のあり方を、特別活動を中心に据えて再構築することを研究の目的としています。また、生徒自身が自らの学びを振り返り、成長を実感するためのツールとして、特別支援学校におけるキャリア・パスポートの作成及び内容、活用方法等の検討を行っていきます。



M1 山岡ゆう子さん 特別支援教育の体制づくり ―効果的な支援方法―



特別支援教育を一部の教員だけで担うのではなく、学校全体で取り組む体制づくりを進めています。教職員が協力して支援方法を話し合う「10分会議」や授業の工夫を通じて、支援の質の向上を図ります。教員の意識を高め、支援文化を醸成することで、生徒が安心して学べる環境づくりを目指しています。

【各コース別・テーマ別協議内容】

【学校マネジメントコース】学校マネジメントの視点と自らの研究との関連についての院生の発表に対し「学校組織の改善に向けた具体的提案であり、学校全体の広い視野に立った継続的探究が求められる」との声がありました。学校マネジメントは学校教育目標達成に向けた組織的資源運用であり、院生の研究では個別のシステムを学校全体の構造や他のシステムとの関係性から整理する視点が重要であることが示されました。組織改善には目的共有や協働意識、意思疎通が不可欠であり、キーマンが学校マネジメントの視座を踏まえて行動することにより、学校組織の変革が促されるという見解が示されました。

【授業実践コース】協議のメインテーマを「ビッグアイデアによる学びへの影響について」として、院生からビッグアイデアの説明と提案があり、校種ごとに3グループに分かれて、「どんな課題があるか・どんな指導や授業計画が必要か・その他」について協議が行われました。その中で各グループから「ビッグアイデアの概念の明確化や精査の必要性」が共通課題として出され、他にも「教科横断」、「深い学び」、「総合との関連」などのキーワードが挙がりました。また、「評価・進学」に関連する内容も話題になり、議題が抽象的ではあったものの活発な議論がなされました。

【特別支援教育コース】「教育実践を貧相にしないユニバーサルデザイン：UDとは」というテーマのもと2つの論点で協議を行いました。「①授業を手続き化しないUD」については、手続きを追うことが主題になり手続き化から画一化・硬直化につながる恐れがあるが、基礎・基本のマニュアルであって実践がそこにとどまってはいけないこと、「②学びを個別化しないUDの配慮」については、個人が「わかる」「できる」のみを目的として集団の学びの質や深さの追求の視点を忘れないこと、集団の学びの偶発性を生じさせるような環境の豊かさを阻害しない工夫の重要性についてまとめました。

当日は諸事情により、対面での発表ができなかった院生もいましたが、参加者の皆様からいただいた貴重なご指摘やご意見を、今後の教育実践や実践研究に活かすとともに、さらに知識や経験を深めていきたいと思っております。

ご参加いただいた皆様、ありがとうございました。

次回「第16回土佐の皿鉢ゼミ」は、2026年2月11日（水）開催予定です。

発行者：高知大学大学院教職実践高度化専攻長 中野俊幸

編集者：教職実践高度化専攻総務係・ニュースレター委員

発行日：2025年9月1日

事務局：教職実践高度化専攻附属学校教育研究センター

〒780-8520 高知県高知市曙町2-5-1（教職大学院係）

TEL 088-844-8457

E-mail ks33@kochi-u.ac.jp